

川崎市武蔵小杉地区における街路景観に関する研究
 -再開発事業によって生じた特異な景観的特徴-
 Study on Streetscape in Kawasaki Musashikosugi district
 -Unique landscape features caused by the redevelopment project-

○鈴木崇史¹, 山中新太郎²

*Takafumi Suzuki¹, Shintaro Yamanaka²

1. 序論

1-1: 研究の背景と目的

再開発事業によって生じる都市景観の変化には大きく2つあると考えられる。1つは大規模な面的再開発により広範囲で景観が大幅に変わるものと、もう1つは地域に街区ごとに行われる再開発により、既存の街並みと新しく生まれた風景が混在するものである。既存街区を活かした跡地利用による再開発では景観がまちづくりに与える影響は大きいと考えられるため、都市の計画を考える上で、景観の側面からの検討が特に必要なのではないだろうか。



fig.1 横浜みなとみらい21地区
 出典: blog. kkf. co. jp (2015. 7. 8)



fig.2 武蔵小杉地区
 (筆者撮影 2015. 4. 12)

1-2: 研究対象と研究方法

本研究では、既存街区を活かした跡地利用による再開発が行われている神奈川県川崎市の武蔵小杉地区を対象とする。

このまちにおける、既存の街並みと再開発事業により生まれた景観が混在する都市構造について、以下のような方法で、その特徴の分析を試みる。

- 1) 統計的なデータを図化する
- 2) 現地調査により街路景観のシーン景観を写真に収めて、再開発の占める景観上の割合を検出する。
- 1-3: 既往研究と本研究の位置づけ

既往研究には、景観に関するものと、武蔵小杉地区自体に関するものがある。奥による研究ではスライド写真を対象に被験者のスケッチによる街路景観の分析を行っているが、再開発による景観変化については述べていない¹⁾。福島らによる研究では武蔵小杉地区の土地利用の変遷を明らかにしているが、この地区の景観特性についての研究はされていない²⁾。

そこで、本研究では、武蔵小杉地区の既存建物群と再開発によって建設された建物群が混在する景観が持つ特性について明らかにする。

2. 対象地域概要

2-1: 武蔵小杉駅周辺の変遷

川崎市は神奈川県北東部に位置しており、政令指定都市の中で最も面積が小さい市であり、以前は駅周辺に工場が多く、工業地域として栄えていた。現在では工場の閉鎖や移転が相次ぎ、その跡地を利用したタワーマンションなどが建設されている。

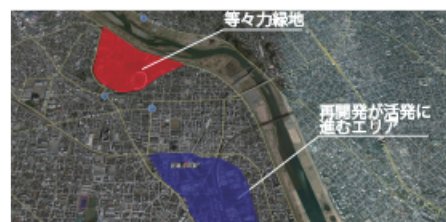


fig.3 武蔵小杉駅周辺航空写真
 出典: Google Earth

2-3: 様々な視点から見たまちの変遷

2-3-1: 統計で見る武蔵小杉の変遷

統計的な資料をもとに、変遷を辿る。

tab.1 町丁別世帯数・人口数
 出典: 川崎市ホームページ (2015. 5. 14)

町丁コード	町丁名	世帯数	人口			前年同月 (平成26年 3月末日) 人口	人口増加率 (%)	(参考)	
			総数	男	女			人口密度 (人/km ²)	人口傾度 (m)
30030	小杉陣屋町1丁目	1,523	2,671	1,389	1,282	2,607	2.5	17,655	8.1
30031	小杉陣屋町2丁目	996	1,917	991	926	1,912	0.3	14,850	8.8
30032	小杉町1丁目	1,303	2,270	1,122	1,148	2,293	△1.0	16,050	8.5
30033	小杉町2丁目	1,092	2,216	1,082	1,134	2,254	△1.7	16,526	8.4
30034	小杉町3丁目	1,967	3,867	1,908	1,959	2,759	40.2	27,670	6.5
30036	下小田中1丁目	2,202	3,972	2,160	1,812	4,042	△1.7	19,682	7.7
30037	下小田中2丁目	2,386	5,162	2,581	2,581	4,986	3.5	18,870	7.8
30038	下小田中3丁目	2,352	4,885	2,632	2,253	4,755	2.7	20,520	7.5
30039	下小田中4丁目	1,705	3,801	1,996	1,805	3,791	0.3	24,316	6.9

武蔵小杉における人口は増加傾向にある。人口が減少傾向にある日本において局所的な人口増加が生じた背景には、タワーマンション建設の影響があるだろう。

2-3-2: 平面から見たまちの変遷

平面で見た時の地と図の関係の変化を辿る。跡地利用を中心とした開発の変遷がわかった。

2-3-3: 俯瞰から見たまちの変遷

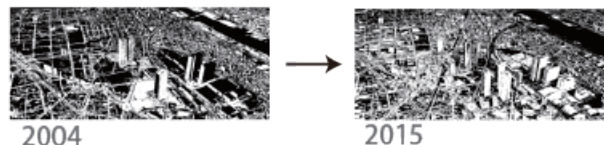


fig.4 俯瞰で見た変遷
 出典: Google Earth

2004年から2015年の間に非常に高層で高密度な街並みへと変貌したことが見て取れる。

1: 日大理工・学部・建築、2: 日大理工・教員・建築

3. 再開発後の現況調査

3-1: 建物高さ



fig.5 建物高さ別の分類分け

fig5 を見ると、赤線で囲った箇所を例に、開発エリアの周辺では 100m 以上の高低差のある並びがあることが分かった。また、開発余地には限りが見られるため、大型再開発は今後 10 年で収束していこう。

3-2: 道路幅員

武蔵小杉の道路は、新しく整備された大きな通りや路地や裏道といった細い道など、街路ごとに多くの特徴を持っている。開発エリアの周辺や駅前は大通りがあり、古くからある商店街や住宅街の周辺では細かい道が見られた。

3-3: 立面

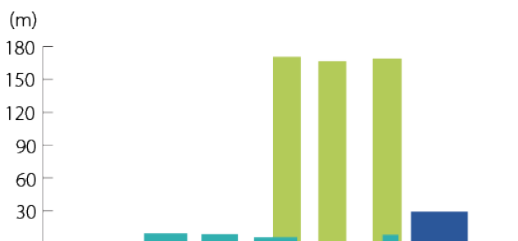


fig.6 立面パターン of 凡例

立面で見ることで、100m を越える建物と低層の建物が混在する街並みにおける高低差が示された。

3-4: 結果

これらの結果から、土地利用にはとても有効だが、再開発によりスケールが大きく異なる建物が近接し、特徴的な街並みの不連続性があることが示された。

4. 景観構成要素の調査・分析

3-1: 分析方法

武蔵小杉駅周辺を 4 つのエリアに分け、エリア毎にいくつかの街路を選定して、それぞれの街路景観を撮影し、分析する。

撮影方法は、地盤面より高さ 150cm の位置でカメラをセットし、写真の中心にその街路の焦点を置くようにし、道を挟んで 2 面が写るようにする。

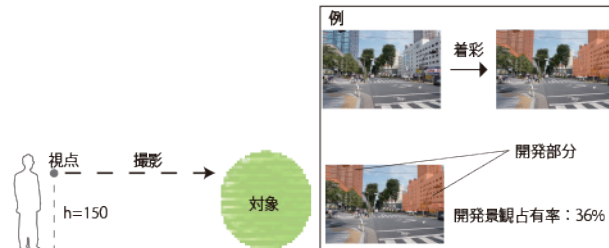


fig.7 撮影方法

fig.8 分析方法

4-2: 用語の定義

開発景観占有率・・・ここでは、街路景観のシーン景観を撮影した写真の中で再開発事業によって 2004 年以降に建てられた建物が占める割合を指す。

4-3: 結果

今回の調査によって街路景観におけるシーン景観の写真を合計 50 箇所所で収集し、着色することによって開発景観占有率を割り出した。

tab.2 着色写真のまとめ (表より一部抜粋)

通し番号	着色写真	占有率 (%)	通し番号	着色写真	占有率 (%)
44		46.46	43		1.62
25		38.81	3		1.22
6		38.68	36		1.07

街路景観で見た時に、撮影する街路やエリアによって異なる表情を持つこと、開発景観占有率は視点の位置や向きが変わることによって大きくなる傾向が見られることが分かった。これは、再開発によって生まれた建物とそうではない建物が近接して建っていることと、視点が混在するエリア内にあることによって生じていると考えられる。

5. 結論

武蔵小杉に出現した超高層スケールが、都市構造を大きく変えた。本研究では、統計データの集計や街路景観における調査・分析により街並みの不連続性を明示することができた。再開発によって生じたその特異的な実態の特性を検証することによって、都市景観の変化を把握し、今後のまちづくりの発展に活かす方法を模索した。今後は、まちに関する他の研究の糸口を加えることで、更なる研究の発展が期待できるだろう。

参考文献

- 1) 奥俊信：瞬間視実験に基づく街路景観構成要素の分析 日本建築学会論文報告集 1982 年 11 月
- 2) 福島紘子 讃岐亮 市川憲良 上野淳 市川徹：武蔵小杉駅周辺の土地利用の変遷に関する研究 日本建築学会大会学術講演梗概集 (東海) 2012 年 9 月
- 3) 五十嵐太郎：美しい都市・醜い都市 現代景観論 中央公論新社 2006 年 10 月
- 4) 原田勝正：南武線いまむかし 多摩川新聞社 1999 年 4 月
- 5) 日本建築学会編：景観法とまちづくり 学芸出版社 2005 年 5 月
- 6) 篠原修編：景観用語辞典 増補改訂版 彰国社 2007 年 3 月